



TITLE:

古代ギリシアに「博物館」はあったか：京大文学部博物館竣工に際して

AUTHOR(S):

---

CITATION:

古代ギリシアに「博物館」はあったか：京大文学部博物館竣工に際して. 西洋古典論集 2001, 別冊: 30-42

ISSUE DATE:

2001-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/68731>

RIGHT:

## 古代ギリシアに「博物館」はあったか — 京大文学部博物館竣工に際して —

古代ギリシアに博物館があったかという質問に対しては、それはなかったと答えるほかない。しかしいわゆる博物館的なもの、現在の博物館の原型のようなものは、古代ギリシアに求めることができるであろう。博物館の機能は「文学部博物館の構想」によれば、(1)資料の調査・蒐集、(2)資料の保存（収蔵）、(3)資料の公開・展示、(4)資料の研究、そしてこれに伴う教育といわれる。博物館は一般にアレクサンドリアのムーセイオンにさかのぼると見なされる。しかしムーセイオンでは、多くの資料、特に書物や動植物の標本が集められ、それに基づく研究、教育が行われたが、物（例えば美術品）の蒐集は行われなかった。この点でムーセイオンはむしろ現在の大学や研究所に似るところがあり、物の蒐集保存を重要な機能とする博物館とは異なる。他方、古代ギリシアで最も多くの物が集められていた所は神殿であり、とりわけデルポイのアポロンのそれであった。ただ、ここでは物は意図的に集められたものではなく、またそれについて調査・研究が行われた訳ではない。しかし、ローマ時代にはプルタルコスのような学者がデルポイの神官になったことからもうかがえるごとく、それはもともと学問研究とは全く無縁のものではなかったと考えられる。つまり、デルポイのアポロン神殿とプトレマイオス王朝の学問所ムーセイオンという一見異なったものの間にある共通のものが見られるのであり、現在の博物館の祖先をたどって行くなら、アレクサンドリアのムーセイオンを経てデルポイのアポロン神殿に至るのではないと思われる点がある。

デルポイは、アテナイから西へ車で約4時間、海拔2500米のパルナッソス山の中腹（570米）にあり、すぐ下に海をのぞむことができる雄大な風景の中にある。デルポイはまた大地の中心であるといわれ、大地の臍という石があった。ギリシアの最も古い文献、紀元前8世紀頃作られたホメロスの叙事詩には、多くの宝物がその神殿にあったことが語られている。デルポイのアポロン崇拜が前8世紀頃から次第に盛んになったことは発掘物によって確かめられている。特にこのアポロン神殿を有名にしたのは神託（神のお告げ）であって、個人ばかりでなくギリシア中のポリスが、さらには外国人や外国の王が使節を派遣して神託を尋ねた。個人であれば結婚すべきかどうか、子供ができないのはなぜか等について、ポリスの使節であれば戦争を始めるべきかどうか、またポリ

スの法律、憲法、条約、さらには飢饉・伝染病の理由などについて尋ねた。アレクサンドロス大王もペルシアへ遠征する際デルポイの神託をうかがった。また、ギリシア人は古くから、とりわけ前8世紀頃から盛んに植民活動を行い、東は小アジア沿岸から黒海沿岸へ、西は南イタリア・シシリー、南フランス、スペインへ、南はエジプト、リビアへ進出したが、彼らは植民する場所を決定するに当たりデルポイの神託を尋ねた。神託はピューティアと呼ばれる巫女が神がかりの状態になって発する意味不明の言葉を「予言者」と呼ばれる神官が書き取り、これをふつう詩の形にして質問者に与えた。つまり、神託は巫女と神官（予言者）との合作であった。ピューティアは明晰な言葉を語ったという説もあるが、プルタルコス、神官が自分たちの義務以上のことをしたという噂があったことを伝えている（『ピューティアの神託について』407B）。巫女はふつう教養のない農家の女で、若い女でも年取った女でもつとめることができたが、身を清浄に保つことが求められた。

ところでアポロンの崇拜者や神託の恩恵に与った者は、個人であれポリスであれ、さまざまな奉納物を神殿に納めた。ギリシア中からだけでなく、外国から、小アジア、オリエント（フェニキア、アッシリア）、エトルリアからも物が集まった。エジプト王（アマシス）はデルポイのアポロンを崇拜し、神殿に寄進をした（フラスリエール『ギリシアの神託』文庫クセジュ、90）。ヘロドトスは、小アジアの王クロイソスがデルポイへ送った多くの奉納物をあげている（『歴史』1.50f.）。神殿やその境内には青銅像、石像、彫刻をほどこした祭壇、宝物を入れる倉（宝庫）が立ち並び、神殿や宝庫の中は各地からもたらされた工芸品、戦争の分捕り品として奉納された甲冑、楯、刀剣などで満たされていた。また集会所の壁には有名な画家によって歴史・伝説から題材をとった絵が描かれていた。

デルポイの神殿とこれらの宝物は周辺の部族がデルポイの神社のいわば氏子になってそれを守った訳である。（氏子同盟ともいう）。もちろんその長い歴史において火災に遭ったり掠奪を蒙ったりしたが、とりわけローマ時代の掠奪は甚だしく、例えば皇帝ネロは500個の青銅像（神々や人間の）を奪ったといわれる（パウサニアス『ギリシア案内記』7.1）。

デルポイには神託を尋ねる者が大勢訪れたが、さらに、初め8年ごとに、後には4年ごとに開催された祭り（ピューティア祭）がギリシア中から大勢の参詣者を集めた。この祭りでは初め歌のコンクールが劇場で行われ、後に歌、音楽のコンクールの他、走り競争や馬車競争が行われた。これらのコンクールに

優勝した者はそれを記念して自分の像を境内に建てた。

このようにデルポイではそこに集まった物を通じて、さらに外国やギリシア中の人間との接触を通じて膨大な知識の蓄積があったと思われる。事実ヘロドトスはしばしばデルポイの神託を引用し、またデルポイの神官から多くの知識を得ている。デルポイに限らず、当時の神殿に多くの知識・情報が集められていたことはヘロドトスからうかがうことが出来る。彼はデルポイと並んで古くから神託が行われていたドドナの巫女から、エジプトではエジプトの神官から詳しい知識を得た。同様に、ヘロドトスの先輩に当たる歴史家ヘカタイオスはエジプトの神官から情報を得ているが、彼がデルポイの神官からも情報を集めていた可能性がある。ところでヘロドトスは方々で集めた知識を分類・整理し、さらにこれに批判・検討を加えているが、デルポイの神官たちは果たして物や知識の分類・整理に手をつけていたであろうか。これについては、もちろん確実なことを知ることができないが、二、三の手がかりを求めてみたい。

第一に、デルポイに限らず、神殿に奉納する者は、奉納物に自分の出身地、名前、奉納する理由などを刻んだが、さらに屋内におかれる奉納物は奉納者の出身地であるボリスが建てた宝庫または奉納者と何らかの関係がある宝庫に収められるのが普通であった。例えば、アテナイ人が奉納した物はアテナイ人の建てた宝庫に収められた。つまり、出所ごとの分類、それがアテナイ人の造ったものであれ、他国から戦利品として奪ってきたものであれ、アテナイ人の奉納物という形の分類が少なくとも屋内に収められた物については行われていた。宝庫が建てられた目的は、前6世紀中頃神殿が火災に遭った際、神殿の中の奉納物を一時的に収蔵するためであったという説もあるが、それはともあれ、宝庫はボリスの富や力を示すものとなり、主としてボリスの、あるいはボリス出身者の奉納物を収めるために用いられた。もちろん全てのボリスが宝庫を建てた訳でなく、スパルタのように他のボリスと共同で利用したボリスもあった。宝庫といっても彫刻やレリーフで飾られた小規模な神殿形式で造られた立派なもので、中には全部大理石で造られたものがあった。このような宝庫は文献によれば13、これまでの発掘調査によれば25あったといわれる。宝庫は他の神殿にもあったが、その数においてデルポイは他にはるかにまさっていた。

屋内に収められる物については、このような出所別の分類が自然な形で行われていたが、この関連で注目されるのは、アレクサンドリアのムーセイオンの図書館では膨大な図書（49万巻、さらにセラピオンの約4万3千）が同じように出所別に分類されていたことである。つまり、集められた図書はどのボ

リスから来たか、どの蒐集家の蔵書から来たかといった出所に基づいて分類され、その後で、作家の名前のアルファベット順に整理された。こうした出所ごとの分類が文献学の発展に非常に大きな貢献をした（つまりテキストの歴史の把握をより容易にした）。デルポイの場合は、ポリスの競争心や見栄によって出所別に分類されたことになるが、第一にポリスを基準として考えるギリシア人の発想や物の見方がムーセイオンの図書館の分類に反映したと言えよう。このような意味で、デルポイの屋内奉納物の「分類」（もちろん厳密な意味ではない）とムーセイオンの図書館の分類の間に一種の共通性を見ることができるであろう。デルポイの場合は神官が自ら整理分類を行った訳ではないが、裕福なポリスには彼らの宝庫を建てるよう勧めることによって、間接的にこの種の分類を促したことはあるだろう。これは物の分類であるが、物の整理・分類においては言うまでもなく、知識の体系的な整理・分類・統合を前提とする。次にデルポイでこのような知識の整理・分類が行われていたと思われる点をあげる。

一つは、前8世紀から前6世紀にかけて盛んに植民が行われた時、デルポイの神託が様々の指示を植民者に与えたことである。中にはそのような指示を与える神託の言葉が伝えられているが、こうした神託を与えるためにはある程度整理された情報、これから植民者がおもむく土地ごとに整理された情報がデルポイの神殿に存在したと考えられる。デルポイの神殿が植民活動と結びつけられた理由として、次のことが考えられる。

(1) 植民はきわめて危険な冒険であったので神の加護を求める必要があった。人々は予め神託をうかがい、それを行うべきかどうか、行くとすればどこに植民地を設けるべきかを尋ねた訳である。デルポイはギリシアの中心にあったため、植民に関する神託はほとんどデルポイで行われた。

(2) ギリシア、イタリアの印欧語民族に共通する慣習として、神に何かを願う時、自分たちの所有物の十分の一を特定の神に捧げる約束をすることが行われていた。（例えば、伝染病に苦しめられた時とか、戦争が起こった時、その災難からの救いを神に求め、代わりに自分たちの物の十分の一を神に捧げる約束をした）。そしてその災難から救われた時、所有物の十分の一が神の神殿に奉納された。ギリシアではこのような神がデルポイのアポロンであり、また十分の一は、物でも人間でもよかったので、住民の十分の一が奉納物として捧げられることがあった。この場合（デルポイでは彼らを養うことができなかった）、彼らは植民者として海外へ送り出され、同時にデルポイのアポロンの信仰を世界中に広める役割を果たすことになった（この関連において注目されるのは、

全く別の事柄について神託を尋ねに来た者がアポロンの神託によって植民地を建設するよう命じられた場合があったことである）。

このようにデルポイの神官は、植民という実際的問題を処理するため、ある程度、整理・統合された知識・情報を所有していたと思われる。

次に注目されるのは、ホメロスの叙事詩にデルポイの神官による知識の整理・統合を反映すると思われる箇所があることである。彼らは巫女の告げる言葉をホメロスの詩と同じ韻律を使って歌の形にした。また古くからピュティア祭で歌のコンクールが行われたことからもうかがえるように、彼らの中に詩人がいたとしても決して不思議なことではなかった。

ホメロスの叙事詩の一つ『イリアス』は、15,000行に及ぶ長大な詩であるが、それは一気に作られたものでもなく、また必ずしも一人の詩人によって作られた訳ではない。二人以上の詩人がその制作に加わった可能性を否定することはできない。ところで、『イリアス』の第2歌に軍船（船軍）のカタログと呼ばれる、ギリシア各地からトロイア戦争に参加した部隊をいわば目録のようにあげている箇所（総計266行）がある〔付表〕。この箇所は目録のような文体と内容の故に『イリアス』の他の部分（語り物の部分）と大きく異なるところから、『イリアス』の詩人（あるいは『イリアス』の大部分を作った詩人）とは別の詩人によって作られ第2歌に挿入されたと考える学者が多い。ここには29の部隊があげられ、各部隊の規模は船の数によって表される。さらに、163のボリスと46名の指揮官の名があげられる。船の数は全体で1196隻、最大の船は120人、最小の船は50人が乗り組んだといわれ、トゥキュディデスは、両者の平均値からギリシア軍全体の数を計算している。その計算によれば約10万人（ $85 \times 1196$ ）のギリシア人がトロイア遠征軍に加わったことになる（『歴史』1.10）。

この軍船のカタログについて1969年にスイスの学者ジオヴァニーニが、それはデルポイの神官によって作られ、『イリアス』に挿入されたという説を唱えた。その理由は次の通りである。デルポイでは先に述べたように、古くからピュティア祭が催され歌のコンクールや様々な競技が催されたが、デルポイはピュティア祭が開かれる度ごとに、ギリシアの各地へ使節団（*θεσποδόκος*）を派遣し、祝祭の開催とそれに伴う休戦を通告した。この使節団の派遣を記録した前3世紀の碑銘文が残っているが、その行き先の土地と、それらの土地があげられる順番がほぼ『イリアス』の「軍船のカタログ」と一致する〔付表および地図〕。特に注目されるのは、『イリアス』では軍船のカタログにあげられ

[付表 『イリアス』第2歌「軍船のカatalog」]

I 中部ギリシア

(1)ボーオーティアー

指揮者数 5 (ペーネレオース、  
レーイトス、アルケシラーオス、  
プロトエーノール、クロニオス)  
都市数 29 (ヒュリエー、アウリ  
ス、スコイノス、スコーロス他)  
船数 50

(2)オルコメノス、アスプレードーン

指揮者数 2 (アスカラポス、イア  
ルメノス)  
都市数 2 (アスプレードーン、オ  
ルコメノス)  
船数 30

(3)ボーキス

指揮者数 2 (スケディオス、エビ  
ストロポス)  
都市数 9 (キュパリッソス、ピュ  
ートー、クリーサ他)  
船数 40

(4)ロクリス

指揮者数 1 (小アイアース)  
都市数 8 (キューノス、オポエ  
イス他)  
船数 40

(5)エウボイア

指揮者数 1 (エレペーノール)  
都市数 7 (カルキス、エイレト  
リア、ヒスティアイア他)  
船数 40

(6)アッティカ

指揮者数 1 (メネステウス)  
都市数 1 (アテーナイ)  
船数 50

(7)サラミース

指揮者数 1 (大アイアース)  
都市数 1 (サラミース)  
船数 12

II ペロポンネーソス

(8)アルゴス

指揮者数 3  
都市数 9  
船数 80

(9)ミュケーナイ

指揮者数 1 (アガメムノーン)  
都市数 11  
船数 100

(10)ラケダイモーン

指揮者数 1 (メネラーオス)  
都市数 9  
船数 60

(11)ピュロス

指揮者数 1  
都市数 9  
船数 90

(12)アルカディアー

指揮者数 1  
都市数 9  
船数 70

(13)エーリス

指揮者数 4  
都市数 2  
船数 40

III 西北ギリシア

(14)ドゥーリキオン、エキーナイ

指揮者数 1  
都市数 2  
船数 40

(15)イタケー他島嶼

指揮者数 1 (オデュッセウス)

都市数 5

船数 12

(16)アイトーリアー

指揮者数 1

都市数 5

船数 40

IV エーゲ海諸島

(17)クレーター

指揮者数 2

都市数 7

船数 80

(18)ロドス

指揮者数 1

都市数 3

船数 9

(19)シューメー

指揮者数 1

都市数 1

船数 3

(20)ニーシュールス、クラバトス他

指揮者数 2

都市数 5 (コース他)

船数 30

V 東北ギリシア

(21)ペラスギコン・アルゴス

指揮者数 1 (アキレウス)

都市数 3

船数 50

(22)ピュラケー他

指揮者数 1 (2)

都市数 5

船数 40

(23)ペライ、イオールコス他

指揮者数 1

都市数 4

船数 11

(24)メートーネー他

指揮者数 1 (2)

都市数 4

船数 7

(25)トリッケー他

指揮者数 2

都市数 3

船数 30

(26)オルメニオン他

指揮者数 1

都市数 3

船数 40

(27)アルギッサ他

指揮者数 2

都市数 5

船数 40

(28)キュボス他

指揮者数 1

都市数 2

船数 22

(29)マグネーテス族

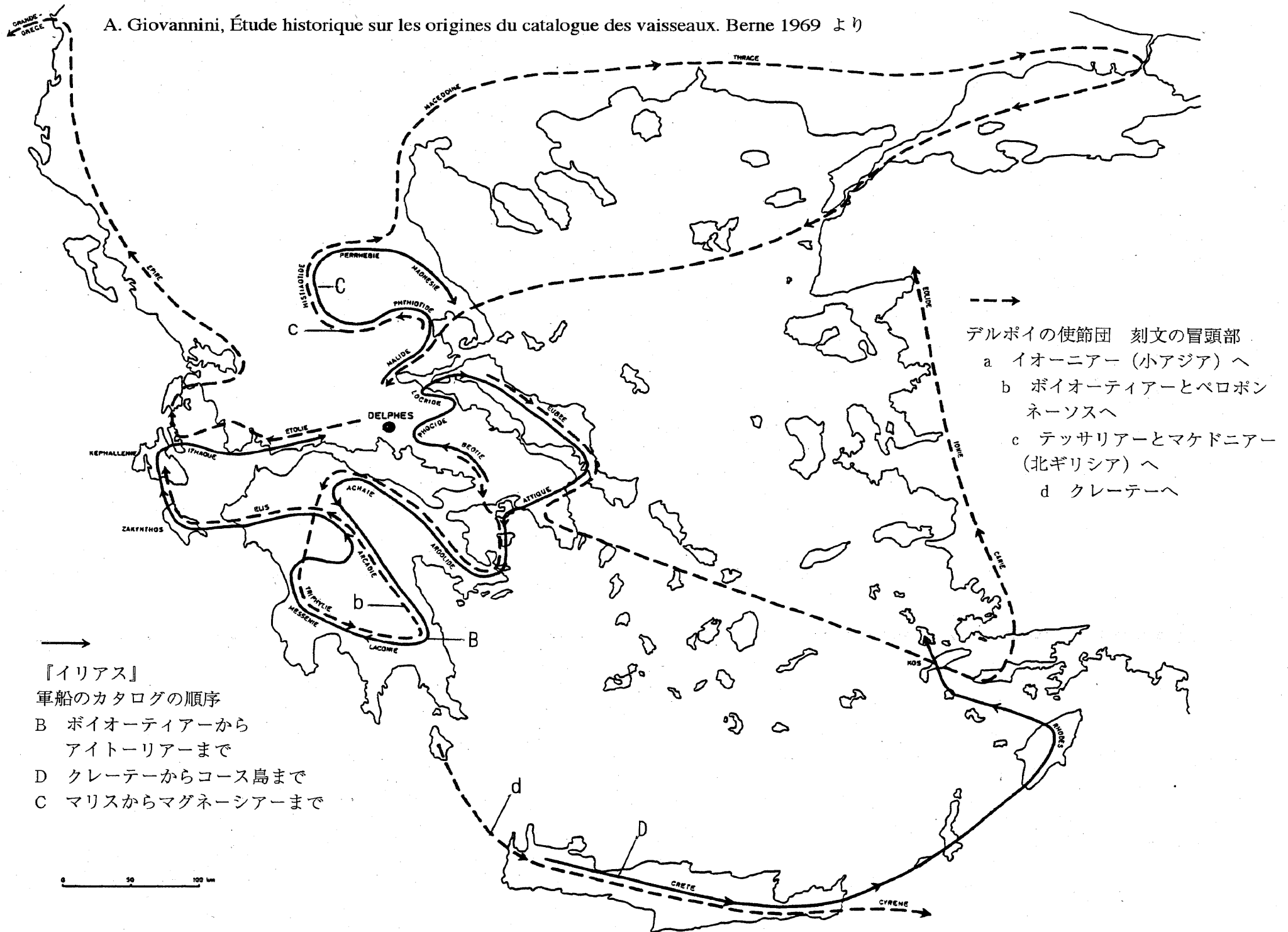
指揮者数 1

都市数 0

船数 40

(松平千秋『ホメロスとヘロドトス ギリ  
シア文学論考』筑摩書房 1985 より)





るポリスがアイトリア（西ギリシア）からクレタ D へ、さらに D のエーゲ海から北ギリシア C へ跳ぶことである。このように軍船のカタログにおいてあげられるポリスの順番が突然跳ぶこと、即ち地理的断絶があることは以前から問題とされ、様々の説が行われているが、これまで納得の行く学説はなかった。他方ジオヴァニーニの説によると、デルポイから派遣された使節団の記録と、軍船カタログの断絶部分はきれいに一致する。つまり、デルポイから 4 組（地図右側の a, b, c, d）、または 5 組の使節が同時に出発したが、b の使節団はカタログの太い線 B に、c の使節団はカタログの太い線 C（北ギリシア）に、d の使節団はカタログの太い線 D に大体一致する。軍船のカタログでは C と D が入れ替わっているが（地図の左側参照）、従来の説では説明できなかった軍船のカタログの地理的断絶は、ある詩人がデルポイの使節団派遣のリストを参照した、あるいは、このリストに基づいて軍船のカタログを作ったと考えることによって最も合理的に説明される。

もちろん使節団派遣リストは前 3 世紀のものであり、一方『イリアス』はこのカタログを含めて前 7 世紀に完成していたと思われるから、使節団の構成または派遣先がその間に若干の変更を蒙ったことが考えられる。事実前 3 世紀の使節団は小アジア、エジプト、シシリーなどのギリシア人ポリスへ赴いたが、しかしその基本的な構成、例えば、ある使節団はペロポネソスへ、またある使節団はクレタへ、またある使節団は北ギリシアへという形は古い伝統によるものであり、『イリアス』が作られた時代からほとんど変わらなかったと考えられる。この説には賛成する学者もいれば反論する学者もいるが、もしこの説即ちデルポイの神官が彼らの使節団リストに基づいて軍船のカタログを作ったという説が仮に当たっているとすると、カタログに見られる数多くのポリスの知識、ポリス出身の英雄たち、さらにはトロイアに出征した軍船の数に関する様々の知識・情報がデルポイの神官によって、彼らの使節団リストに基づいて整理・統合されたということになる。軍船のカタログに盛られた知識・情報が、ミケナイ時代（前 12、13 世紀）にさかのぼるものであるか、あるいは、前 8、7 世紀頃のギリシアを反映するものであるか、学者の意見は分かれているが、いずれにしてもジオヴァニーニの説が当たっているとすれば、デルポイの神官たちは彼らが所有していたと思われる膨大な知識・情報を整理・統合する方法を心得ていたことになるだろう。さらにヘロドトスやヘカタイオスがこのような方法を彼らから学んだ可能性も考えられるだろう。

ところで学問の発達には、その学問が全ての人々に開かれていること、また

他人の批判を拒否せずに受け入れることが重要であったと思われるが、デルポイの神殿はギリシア人にも外国人にも開かれていた。また神託はしばしば当たらなかったといって批判されたが、アポロン——正確には彼の神官たち——は、その批判に対し反論したり弁明したりしている。神託が当たらなかったというのは人間が神託を誤って解釈したからであるが、事実それはしばしば曖昧、難解であった。プルタルコス、神託の曖昧さこそ予言の神アポロンにふさわしい、しかし関係者がその意味を解くことに苦心すれば分かるようになっている、と言っている。ペルシャ戦争の際、デルポイの神託はアテナイ人に「木のとりで」が与えられるであろうと予言したが（ヘロドトス『歴史』7.141）、この「木のとりで」をめぐってアテナイ人が様々の解釈（例えば「生け垣」のあったアクロポリス）を出した。そしてこれを「軍艦」と解釈する者の意見が通って軍艦を建造し、サラミスの海戦でペルシャ軍を破って勝利を収めた。

アポロンの神託や神殿に集められた情報が一般に開かれたものであったことはヘロドトスを読めば明らかであるが、これは神官が彼らだけの閉鎖的な階級を作らなかったことと関係があるように思われる。神官は普通の市民であり、世襲の者もあれば、プルタルコスのように後から任命される者もあり、途中でやめる者もいた。儀式や祭りで生け贄を犠牲に捧げた時は、市民たちが犠牲式の後の宴会に招かれ、一緒に食事をしぶどう酒を飲んだ。神殿は市民たちと他国の人との交流の場でもあった。

悲劇詩人の一人エウリピデスに、デルポイを舞台にした劇（『イオン』）が残っているが、ここでは、アテナイからやってきた女たち（合唱隊の女たち）が、神殿に飾られている彫刻を感歎しながら眺める場面がある。女たちは英雄ヘラクレスの活躍や神々と巨人族の戦いを眺めている。とりわけ巨人族との戦いのモチーフは一般に好まれた。巨人族は傲慢な、思い上がった者たちであって、その力をたのんで神々による秩序を破壊しようとしたが、アポロンやヘラクレスなどによって滅ぼされた。デルポイの神殿には「汝自身を知れ」また「度を過すなかれ」という言葉が刻まれていたが、巨人族の戦いはまさに身の程知らずの者の破滅をあらわすものであり、このように言葉によってのみならず、彫刻（物）によって教育が行われていた。デルポイがギリシア人の道德教育においてきわめて重要な役割を果たしたことはしばしば指摘されているが、ギリシア中や外国から来た者たちはそこに飾られている奉納物や壮麗な神殿を宗教的感動をもって眺めると同時にそれを芸術として学んだと思われる。もちろんアテナイ人のように大きなポリスから来た者たちは、既に彼らのポリスにおい

てそのような宗教的芸術的教育を受けていたと思われるが、しかしエウリピデスの劇では、アテナイから来た女たちがデルポイの神殿の見事さに感歎している。ギリシアには芸術品や工芸品を正確な言葉によって言い表す伝統が古くからあり、それはエウリピデスの劇の場面にも反映しているが、このような伝統は一般の人々にとって芸術作品の理解をより容易にしたであろう。

このようにデルポイでは博物館で行われるような調査・研究の芽生え、さらに物による教育の原型があったと思われるが、一方、ギリシアにおいて最初の組織的な教育研究はデルポイに似た宗教的雰囲気の中で行われたことが注目される。プラトンの学校アカデミアはアカデモスという英雄神が崇拝された土地にあり、アリストテレスの学校リュケイオンはアポロンに捧げられた神聖な土地に設けられた。プラトンやアリストテレスは神の像や神の祭壇があちこちに建てられた森の中を歩きながら議論を行い、神聖な森の中に設けられた公けの体育場の一部を講堂にして講義をした。またプラトンの学校にもアリストテレスの学校にもムーセイオン、つまり文芸・学術の女神ムーサイをまつた社があり、ムーサイ崇拝の行事としてムーサイに犠牲が捧げられ、デルポイでも行われたように、犠牲の後の共同の飲み食い（シンポジウム）が行われた。アリストテレスの学校では儀式や犠牲を司る、神官に相当する者（ιεροποιός）がいた。プラトンやアリストテレスの学校は元来ムーサイを崇拝する宗教的結社（団体）であったといわれる。女神ムーサイはギリシア人の考えでは、アポロンによって導かれるといわれ、アポロンは古くから文芸・文学の神として崇拝されていた。

アレクサンドリアのムーセイオンは、プラトンやアリストテレスの学校のムーセイオンを引き継いだ。特にアレクサンドリアのそれは、その初期の段階で自然科学により重点を置いた点において、アリストテレスの学校をさらに発展させた。事実、アレクサンドリアのムーセイオンを最初に組織したデメトリオスは、アリストテレスの孫弟子に当たる者で、アリストテレスの学校を手本にしたといわれる（前三世紀の初め）。そこには約 100 人の学者がいて、主に研究調査に従事し、時には講義を行った。また彼らの講義を聴講する、あるいは彼らに直接師事する形で学生がいたことが知られている。そこにはアリストテレスの学校のように共同部屋があり、ここでメンバーと一緒に食事をした（ムーセイオンの中に住んでいたかどうか不明）。また女神ムーサイがまつられ、神官がその儀式や生贄を司った。つまり、アレクサンドリアのムーセイオンも、プラトンやアリストテレスの学校のように宗教的結社（団体）の形をそなえて

いた。デルポイに限らず、犠牲が捧げられた後生贄の動物の肉と一緒に食べ酒を飲むこと（シンポジウム）はギリシア人の習慣であったが、プラトンやアリストテレスの学校では食事の後酒を飲みながら（プラトンの学校では、おつまみはドングリの実を炒ったものなどが出されたと思われる）議論が行われた。シンポジウムは女神ムーサイにふさわしい仕方（μουσικῶς）で行われたという（アテナイオス『食卓の賢人たち』547f.）。プラトンによれば「酒を囲んで共に閑談の時を過ごすことは、それが正しく行われるなら教育に寄与するところ実に大きい」といわれる（『法律』641cd）。

このようなシンポジウムはアレクサンドリアのムーセイオンにも引き継がれ、シンポジウムにはプトレマイオス家の王も出席して学者たちの議論に加わった。プトレマイオス家の王は大抵幼少の時からムーセイオンの有名な学者によって教育され、中には歴史書を著し、悲劇を書いた者がいた（プトレマイオス1世、同8世）。クレオパトラもまた学者たちのシンポジウムに加わって議論をしたと伝えられる。彼女は美人ではなかったが（当時のコインに刻印されている像を見ると鼻が大きすぎる）、機知に富み、学問の造詣が深く、多くの語学に精通していた。アラビア人、ユダヤ人、ペルシア人、エジプト人には彼らの言語で応対したといわれる（プルタルコス『アントニウス伝』27）。

以上、デルポイのアポロン神殿からプラトン、アリストテレスの学校を経て、アレクサンドリアのムーセイオンを見たが、これらに共通する点は、そこで何らかの形で文芸・学術の神への崇拝が行われていたことである。デルポイの神殿の神官の間で既に学問研究の第一歩である知識・情報の整理・統合が行われていたことは仮説の域を出ないが、しかしそこでの知識が開かれたものであり、一種の知的活動が行われていたことは、デルポイの神殿が「七賢人」の伝説に結びつけられていたことや（プルタルコス『七賢人の饗宴』）、それがヘロドトスなどの歴史家を強く引きつける力を持っていたことなどからうかがうことができる。ただ、デルポイの神殿はその開放的な性格のためもあって、しばしばポリス同士や、ポリス内部の権力闘争に巻き込まれ、政治的に利用される結果を招いた。（例えば、ペロポネソス戦争ではスパルタ側を支持する神託を下した）。一方、学問知識の開放性はプラトン、アリストテレスの学校やアレクサンドリアのムーセイオンについても言える。プラトンの学校ではギリシアの各地から学生が集まり、その中には女子学生が2名いた。アレクサンドリアのムーセイオンでは、ユダヤ人やエジプトの現地人がギリシア人と共に研究に従事し、またその末期には、有名な女性の数学者ヒュパティアがいた。もちろ

ん学問知識が開放されていたことは、プラトンの学校やムーセイオンが能力のない者を受け入れたことを意味しないが、外国人や女子に対する差別、偏見がなかったことはデルポイの神殿、プラトンの学校、アレクサンドリアのムーセイオンに共通していえることであろう。

また先程述べたように人々は、デルポイの神託を自由に批判し、時にはこれに抗議さえした。さらに神託が当たるかどうか調べることも行っている。例えば、ある小アジアの王がデルポイをはじめ方々の有名な神託所に使いをやって神託をうかがわせ、どの神託所の神託が最も正しいか試した（つまり、使いの者たちが王のもとから出発して100日目に王が何をしたかを尋ねさせた）。こうしてデルポイの神託が最も正確であったので、以後この神託に従って行動した、という話がある（ヘロドトス『歴史』1.47）。人間が神を試すという、一見、不敬な行為さえ許された訳である（ギリシャ人でないからこのようなことをしたという説もある）。一方、プラトン、アリストテレスの学校やムーセイオンでは教師の学説に対して、自由に批判が行われた。弟子たちがプラトンの説を批判したことはよく知られている（アリストテレスはプラトンのイデア論を批判した）。アレクサンドリアのムーセイオンでは、理想的な詩は短い詩であるべきか、それともホメロスのように長い詩であるべきかという問題をめぐって先生と弟子の間に論争が起こった。ピュタゴラスの学校のように閉鎖的排他的な学校もあったが、これは例外で、ギリシアでは学問であれ宗教であれ権威主義やドグマチズムに陥ることはなかった。これはむしろ、ギリシア人の特性と言うべきものであって、それがデルポイの神殿、プラトンの学校、アレクサンドリアのムーセイオンなどに現れたと言えるかもしれない。しかし見方を変えれば、やがてプラトンの学校やムーセイオンに発展して行ったものが、既にデルポイにおいて芽生えていたとも言えるであろう。そのような芽生えがデルポイにしかなかったという訳では決してないが、デルポイのアポロンが古くからギリシアにおいて精神的指導者・教育者ともいえるべき役割を果たしていたことを考慮に入れるならば、その影響するところは非常に大きかったと言える。

現在の博物館には、デルポイの神殿やムーセイオンの宗教的な性格は見られないが、「文学部博物館の構想」でうたわれている、「もの」を通じて行われるところの「こころ」と「あたま」の養成は既にデルポイにおいてその芽生えが認められた。このような意味において文学部博物館は、何らかの形でデルポイの神殿とつながりをもつように思われる。また、現代の博物館からデルポイの神殿に

さかのぼってみる時、改めて感じられることは、学問研究にとって特に大切なものは、学問研究以前のもの、例えば、宗教的雰囲気とか自由な開放的雰囲気の中で酒を飲みながら行われる「こころ」と「あたま」の養成であり、このような学問以前のものが学問に血を通わせるものとなることである。このような学問研究以前の面においても、文学部博物館は京大において中心的役割を果たすことが期待される。

(1986年6月26日 於 京都大学文学部)